

民間レベルでの構築された文化への理解

——中国の一般書籍における「日本」のイメージを考察する——

大阪市立大学 祝方悦

1 目的

日中関係の多くは経済や政治方面で語られてきた。中国政府が刊行した教科書及び大衆メディアによって「構築された」日本のイメージが窺える。一方、80年代から90年代にかけて、日本政府によって「30万人留学生計画」が実施されたことにつれ、とりわけ中国人留学生の入国が盛んに続いてきた。いわゆる若い世代の「知日派」が語る日本があり、それは教科書などで記述された「日本」のイメージと大きな違いが見られる。「日本」はよりコンテンツ化され、「知日派」によって新しく構築されるに違いない。このようなコンテンツ化された日本に関する一般書籍に目を向け、語り手の経験と感性だけによるものではない「日本」はいかに構築されたかを探りたい。近頃日中関係が張り詰め、政治以外に求められているのは東アジア地域の安寧秩序であると思うため、本研究は国際社会における隣国紛争を平和へと道開きすることに対し、新たに考案することを図る。

2 方法

「日本」——外国人が評価する、一般的に概念化された日本を代表するものとする。国際世論調査における外国からの日本への「イメージ」というのは「国」という枠組みに縛られることなく、日本文化、日本人等も含む(真鍋 1985)。本研究で言及する「日本のイメージ」について、この概念を用いたい。研究方法としては近年出版された評価の良い一般書籍から6冊を厳選し、内容分析などの手法を用いる。分析を通じ、文化を理解するプロセスの一つとして、一般書籍は重要な意味づけが付与されていることが覗ける。これらの書籍において、著者の経歴と中国の若者社会の事情などを参考にしながら、その内容としての意味について考察を行う。

3 結果

各書籍は日本事情の入門書ではなく、文化が中心で、政治、経済、他の国との関係にも触れた。著者の個人感によるものが多いが、文化に関しては社会の隅々まで概論的に及んでいる。ポジティブな面が多く含まれ、深刻な社会問題も言及された。はじめて日本を知りたい中国人にとっていい刺激になりうる。

4 結論

なぜ中国人は「反日」をするのか。この問いについて、世間からはこれまで無数の研究者や評論家が事例をあげて解析した結果として、歴史問題がほとんどだった。大中華思想はあくまで島国の日本に対し、軽視的な態度にすぎないが、「反」まではいかなかったはずと思われる。近代中国には、外来文化を吸収する重要さが十分に認識されておらず、必要としないものを排除する意識も必然的に生まれ、後の反日デモが盛んになる原因の一つと見られる。もちろん、「反日」のメカニズムが依然として不透明ではあるが、文化の越境に伴う知識、認識の受容は留学することによって認証を得られる。中国の図書事情に関する研究は大いに展開する余地があり、民間レベルでの会話を進展させるのに重要な役割を果たしている日本事情に関する書籍を軽んずることはできない。中国において書籍を通じ、その国の文化、社会事情を概観的に知ることが民間レベルでの友好交流に大きな効果があると結論づけたい。留学生たちが自分の見た「真実の日本」を熱く語り、近代、現代の日本を客観的、公正的、自由的に感受したうえ、知識と融合した産物——「コンテンツ化された日本」をより多くの中国人に関心を持ってもらいたいものである。

文献

真鍋史, 1985. 『世論の研究: 内容分析と質問調査による接近』, 慶應通信.